
初投稿です。。。

ポリペン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初投稿です。。。

【Nコード】

N2353H

【作者名】

ポリペン

【あらすじ】

性転換を含みます。苦手な方は読むのをやめください。

第一話

俺は山本高志　　17歳の男子高校生だ。

親父は、ある研究所の所長だ。

母親は、さあどこかで旅を続けているのだろう・・・

普通の高校に通い、普通の生活をし、今にいたる。

それは夏休みに入り、

親父の研究所に呼ばれて行った時から、

俺の人生は狂いだしていたのかもしれない・・・

「親父くきたぞ」

俺は親父の研究室のドアを開けながら父親を呼んだ。

「おおー来てくれたか。待ってたぞ。」

親父の顔を見るのは1週間ぶりだ。

なにせこの親父はほとんど研究所に住んでいるようなものだ。

親父は、研究の為なら自分の生活まで壊してしまう性格なのだ。

そんな親父が研究所の奥から出てきた。

「まあ、疲れだろう。とりあえず座ろうじゃないか。

川崎くん、珈琲を入れてくれないか？」

「はい。分かりました。」

「で？何のようだ？こんなところに俺を呼び出して？」

「ん？息子の顔が見たくなっただでは駄目か？」

「駄目だ！！本当に何のようだ？」

そこで珈琲が持ってこられた。

「珈琲です。」

「どうも。」

俺は運ばれてきた珈琲を一口飲み、親父を問い詰めようと

立ち上がろうとしたら、急に眠気が襲ってきた。

（もう駄目だ・・・）

最後に俺は親父がニヤツと笑ったのを意識の薄れる中で見た気がし

た。

「ようやく眠ったか。」

さあ川島君、高志をベッドに運んでくれ。」

「はい!!」

第一話（後書き）

短いですがよろしく願いします。

また連載は不定期です。

第2話

俺が目覚めたのは、夕方だった。

単純に考えて昼間、意識を失ったのだから

4時間は意識を失っていたらしい

俺はなにをされたのか分からなかった。

とりあえず周りが話していることに集中した。

「それにしても可愛そうだよな。」

「ああこの娘の事だろ？」

たしかに親の実験で女になってしまうとはな」

「ああそうだな」

俺はその話を聞いた後、音もたてずにベッドを降り話していた研究員の背後に近づいた。

「さて、その話をもっと詳しく教えてもらおうか？」

俺は二人の研究員の肩を叩きながら言った。

すると研究員は青ざめた顔で・・・逃げていった。。

「クソボケ！！さて、こらっ！！」

俺は追いかけようとしたが、いつものように走れない。

俺は追いかけるのを諦め、俺が寝かされていた部屋に戻り、ひとまず、自分の体を見えることにした。

セミロングの髪に白く細い手、足

顔は部屋に鏡が無くて、見れなかった。

胸は・・・まあカップぐらいだろう。

服は、俺がここに来たときと同じ服装のままだ。

俺にとって大事なところは・・・やはり無かった。

俺はその事実を受け止めなくなかったが、受け止めなければならなかった。

俺は数分、自分の体を確かめていた。

するとだんだんこの体にした張本人に怒りを覚えだした。
（クソツタレ！！あんの馬鹿親父めが！！）

俺は、寝かされていた部屋を出て、

俺の親父の部屋に向かってダッシュした。

第2話（後書き）

特になし！！

以上！！

第3話

俺は、親父の研究室の前に着いた。

俺が、ドアを開けようとドアノブに触れたとたん体中にビリッと電気のようなものが走った。

するとドアの向こうから親父が

『はははっ！！実験は成功だな

どうだ入ってこれないのか？我が娘よ。』

「誰が娘だと！！」

俺は途中で拾った鉄パイプをドアに打ち付けた。

ガンッ

だがドアはへこんだだけだった。

『これはやばいぞ』

ドアの向こうから何かが動く音が聞こえてきた。

俺はもう一発ドアに力いっぱい鉄パイプを打ち付けた。

ガンッ

ドアはもう一発打ち込んだら、壊れるというところまでへこんだ。すると向こう側から

『私は逃げさせてもらっよ』

「逃げんじゃねえ〜！！」

俺は叫んだ。

だがその苦労は無駄だったようだ。

俺がドアに鉄パイプを打ち付けると、ドアは壊れ部屋の中はもぬけの殻だった。

俺は急いで窓に駆け寄った。

するとそこには誰ももういなかった。

親父を追うことを諦め、元に戻る手がかりが無いかを

調べるために、部屋を搜索してみたが、何も出なかった。

一応パソコンの中も調べてみたが、何一つ手がかりは無かった。HDDの中も全て調べられるところは探した。

搜索をおわり何一つ手がかりも無く、途方にくれていると

俺の携帯電話がメールの着信音を響かせた。

「あん？こんな時になんだよ！！」

俺はメールの送信者の欄を見た。

《親父》

こんな体にした張本人からのメールだった。

俺は急いで、メールを見た。

《我が娘よ。

お前には新しい戸籍と住民票を用意した。

これで高校に行け。

お前の通っていた、高校だ。

ついでに服は家に届いてある。

着てくれたまえ。

お前を戻す方法は分らない。

せいぜい頑張って生活してくれよ。

金はいつも通り振り込んでやるからな。

正体はばらさない方がいいと思うぞ

その理由はお前なら分かるだろう？

私は逃げるよ。一緒にいたらお前に殺されかねないのでね。

さうばー！ー！《

「・・・あんのクソ親父！ー！」

もう研究所にいても意味がないと分かったので家に帰ることにした。

第3話（後書き）

短いです・・・

後書きも思い浮かびません・・・

第4話

帰りの道は特に知り合いにも会うことなく、家にたどり着いた。
普通の二階建ての一軒屋だ。

ドアを開けようとすると、そのドアは開いていた。

俺は家を出るときにしっかりと戸締りを確認したはずだ。
そして結論にたどり着いた。

「泥棒か!!」

俺は、静かに家の中に入った。

玄関の横の応接間には誰もいなかった。

どんだん奥に進んで行き、台所まで来た。

そこから、明かりがもれている。

「そこか!!」

俺は、中にいるだろう人に向かって言った。
すると中から俺の知っている人が出てきた。

「あなたは誰？」

「お、おふくろ？」

「私は、あなたみたいな子産んだ覚えはありませんが？
どちらさまですか？」

正直に答えないと警察呼びますよ。」

おふくろは携帯を片手に言ってきた。

「俺だよ。俺、高志だよ。」

おふくろは携帯を開き、

「正直に言いなさい!!」

「ああ、もうめんどくさい!!」

俺は、今日あった出来事を、話した。

すると親父のせいと言つと、おふくろも信じた。

「そうだったの。高志あんたも大変ねえ」

「そう思うなら助けてくれよ。」

「無理よ。」

私はね。本当は娘がほしかったの。」

それを聞いたとたん俺はズッコタ

「それが変わってしまった息子に対する言葉か!」

「まあ良いじゃないのよ。」

「ところでおふくろは何で帰ってきているんだよ。」

「旅にあきたのよ。」

俺は本日、二回 ズッコケた。

「おいおい。」

「まあ良いじゃないのよ。」

それよりもご飯にするわよ。」

「へいへい」

今気がついたが俺とおふくろは順応力がもの凄く高いのではないかと・・・

食事の途中、何処に行っていたのかをおふくろに聞いたら

「ハワイよ。」

ととっても有名な観光地の名前が出てきた。

俺たちは元々話すほうではない、だから食事の話したのはこれだけだった。

食事も終わり、俺はテレビを見ていた。

するとおふくろが

「高志。そういえば女の子になったのよね。」

じゃあ女の子の名前何にする?」

そつえば学校に行くのにこのままの名前だとまずいかもしいない。

「ああそつだな。。。」

俺はしばし考え

「《貴子》なんかどうだ?

よくある名前だろ?」

「そうね。それにしよう。」

「それじゃあ貴子ちゃんお風呂はいちやって俺はそのとき何も考えずに答えていた。」
「はい。」

第4話（後書き）

またまた短いです。。。

更新が遅い上に、短い。。。

最悪ですね（・o・一一一）

第5話

俺は脱衣所まで着てやっと気づいた。
このまま入って良いのかと・・・

「ええい!!」

俺は意を決して服を脱いぎ、裸になった。

俺が変わってから同じ服装だったので、

下には下着だけだ。

ブラなんてものはしていない。

だから服を脱ぐとパンツ一丁なのだ。

(これは俺の体、これは俺の体。)

俺は自己暗示をかけながら、風呂場へと入っていった。

俺はなるべく自分の体を見ないようにしながら、
体と髪を洗った。

そして浴槽に入り、胸の重みが消えて楽になり、

一息入れたところで、

風呂場の外で、何やら物音がした。

誰かと思いい扉を少しだけ開け見てみたら、おふくろだった。
するとおふくろは、

「貴ちゃん下着とパジャマここにおいて置くからね。」

そついうとおふくろも服を脱ぎだした。

「おふくろ、何で脱ぎだしてんだ？」

「決まってるじゃない。貴ちゃんとお風呂に入るためよ。」

「何でだよ。一人で入れよ!!」

「いやだ!!」

話しながらもおふくろは服と下着を脱ぎ、風呂場へ入ってきた。
俺は久しぶりにおふくろの裸を見た。

おふくろは実年齢40歳にもかかわらず

20代に見えるほど若い。（童顔という？）

またまた言っと、体は

「口り体系つつつつ」

そこまで言っと殴られた。

「貴ちゃん、あなたには教育が必要そうね。」

おふくろは、俺に有無を言わさない様な剣幕で言ってきた。

俺は反対の仕様が無く

「は、はい！！」

と、ところで、ど、どんな教育でしょうか？」

「あなたを女の子らしくするための教育よ。」

「今のままだと？だめ？」

俺が知りうる女の子の必殺技《上目使い》を実行してみることにした。

「う、だ、だめ！！」

だが、女には効かなかったようだ。

逆に、おふくろを活気付けてしまったようだ。

「貴ちゃん。そんなことが出来るんだから、

女の子の服装や、しゃべり方ぐらい出来るわよね？」

「う・・・」

俺は返す言葉に詰まってしまった。

実質、俺は女の子のしゃべり方ぐらい知っているし、真似も出来ないことはない。

それはある女が関係しているが今は関係ないのでおいておこう。

「出来るんでしょう？」

おふくろがまた、有無を言わさないような剣幕で迫ってきた。

「は、はい。出来ます。」

俺は正直に答えた。

「なら、それを実行しなさい。」

俺は、逆らうことが出来ず、男を捨て、いわれた通りに女言葉でしゃべった。

「それじゃあ私はこれで上がるわ。」

俺はその場から逃げるように風呂から出た。

そして脱衣所に置かれていた、

下着を見ると、ブラは無く、ショーツとシャツだった。

俺はそれを男を捨て、それとパジャマを着用した。

そして俺の部屋へと一直線にかけていった。

俺は部屋に着くなり驚いた。

ハンガーには元々かかっていた、高校の制服が女子用になっていた。ただし、夏用の制服は、上は男女同一で下だけがズボンとスカートと違うだけである。

俺は気になり、クローゼットの中も見てみた。

そこには・・・俺の服ではなく女が着る様な、ワンピースやその他もろもろの服が

いっぱい詰め込まれていた。

「・・・」

俺はもう返す言葉がなくなっていた。

この時、俺は思い出した。

親父からのメールで

『服は家に届いてある。』と書いてあったのを思い出した。

(こういうことだったのか・・・)

俺は、ジーパンなどの男女同じようなもので着れるものを探したが、見つからなかった。

俺は諦め、ベッドに横になった、

そして考えた、

「俺はこれから、どうなるんだろう。」

だがその答えは浮かばなかった。

そして今日の疲れがきたのか眠くなってきたので、

俺は、眠りについた。

第5話（後書き）

45分ほどで白紙の状態から書き上げました^^。
誤字脱字が多いかも知れませんが・・・

これから進展さしていく予定です。

第6話

午前8時30分

俺は休みの日はトコトン寝る派なので夏休みなんかはまだ心地よい眠りの中にいるはずの時間だった。

今日も例によらずその時間まで、グッスリ寝ていた。

ところが、その心地よい眠りは嵐のようにやってきた、

おふくろによつて阻害された。

「おきなさーい!!」

貴ちゃん服買いに行くわよ!!服!!」

俺は眠いながらも目を開け、時計を確認、

そして、おふくろに真実をいった。

「まだ、店あいてない・・・寝る!!」

そして俺はまた心地よい眠りのなかに・・・入れなかった。

「駄目よ」。女の子はね、買い物に行くにも準備が必要なんだから。

「

おふくろが耳のそばで叫んだ。

それにより俺は目が覚めた。

そして俺は体を確認。

胸があつた。

「戻ってない・・・」

少し期待していたのだが・・・夢落ちと言う物を

俺が悲しんでいると、

おふくろが

「戻ってないわよ!!。さあ服買いに行きましょう。」

俺は、昨日確認した、服を思い出し、

「親父が送ってきていた、服が大量にある。」

実際、クロゼットの俺の男の服が置いてあった場所は、全て、女物の服に変わっていた。下着もだ。

「まだまだよ。女の子はね、服がたくさんいるのよ。」

それに替えの高校の制服はないでしょ？」

確かにおふくろが言うことは一理ある。

この大量の服の中には、替えの制服が無かったのである。

なぜか壁にかけられていた制服一着だけがあったのである。

すると次の日洗うとすると、学校に着て行く制服がないのである。

俺はしぶしぶ起きだした。

おふくろと俺は早々と朝食をすませ、出かける準備をした。

俺は、クロゼットの中にあった。

ワンピースを自らき・・・なかった。

だがおふくろに強制的に着せられてしまった。

そして三面鏡の前に座らされて、おふくろは化粧道具をあさり始めた。

この時、俺は初めて自分のいまの顔を見たのだ。

今の俺の顔は、整った顔立ちで、

男の頃の俺とはほぼ別人のように見えた。

しかし、目元は男だったときの面影が、とても薄いが残っていた。

俺は自分の顔を鏡で凝視していると、おふくろが

「顔はまあまあ良いくらいじゃない？」

それは俺も言えた。

男だったときの評価からいってもAランクだろう。

SS / S / A / B / C / Dランクとある。大体の人はBランクだ。

「でも胸がちよつとかわいそうね。」

ただ胸がランクの割には小さい気もする。

そしておふくろによる、俺への化粧が始まった。

俺はどうにでもなれと思い、じつとしていた。

時間にすると約5分

俺の体内時計では、10分だった。

まつ毛をきれいにそろえ、軽く口紅を塗っただけだった。

それだけでも俺には化粧する前から相当代わっているようにみえた。

そして時間を見ると、10時になっていた。

大体の店なら開いている時間だ。

そしておふくろは元気いっぱい、

俺はしぶしぶと家をでて

おふくろの車に乗り込んだ。

進むこと15分ある某有名洋服店についた。

安いということでは有名な店だ。

俺はここでは制服なんか売ってないと確信しながらも、

おふくろに逆らわずに、静かについていった。

ここからおふくろによる、俺のため(?)の、服選びが始まった。

第6話（後書き）

さていよいよ6話まで来てしまいました。

自分自身ここまで続けて来れたことが奇跡だと思っ
ています。

でもまだまだ物語りは進みます^^

第7話

「キヤーカワイー」

突然、俺のおふくろの声が、店中に響き渡った。

俺がその場にかけてけると、

おふくろが、何故か、メイド服を持っていた。

（何で、そんなものが、この店にあるんだ？）

俺は自分の中で考えた。

（おかしい。こんなものは秋葉原もしくは通販で、売っているはずだ。

なんでこんな地方にあるんだ？）

「貴ちゃ〜ん、これ着てこれ！」

おふくろが俺にメイド服を薦めてきた。

俺は本気で、拒否をした。

「本当にいやです。やめてください。」

俺はなぜか敬語になっていた。

すると俺の真剣さが伝わったのか

おふくろは着せるのを諦めてくれたはずだ。

今、買い物籠に入れられたのは見なかったことにしよう・・・

そして俺はジーンパンを手に入れることが出来たのでとても満足だった。

その後、制服を買いに行ったのだが、そこでは何事も無く、無事に終わった。

しかし、家に帰ってからが大変だった。

おふくろがメイド服を無理やり着せてこようとするのだ。

俺は拒否をし、拒否をし、拒否をしまくった。

おかげでメイド服を着せられなくてすんだ。

その後は、飯を食い、風呂に入り、いつもと同じの生活をした。

次の日の朝、俺はおふくろに起こされて絶句した。

なんと、おふくろがメイド服を着ているのだ。

それがまた・・・似合っている。（ ）

（詳しくは後書きに・・・分かる人にはわかるネタで書いてます。）
いやはや、年のことなんかさっぱり分かりません・・・

俺が感心していると、おふくろは

「貴ちゃんが着てくれないから、自分で着ちゃった。テヘッ」

なぜか下をちょこつと出しながら言い放った。

俺に『萌え』が生まれてしまう所だった。

これからおふくろは朝、俺を起こしにくるときは、メイド服で来るようになっちゃった。

そして朝食を食べ終わると、普通の服に着替えてくるのだ。

そして夏休み中、俺はスカートでいる方が多くなっていた。

それは、おふくろに

「この夏休み開けたら、女子高生として高校に通うんでしょ？」

だったら、今のうちにスカートに慣れてしまいなさい。」

というアドバイスを、7割方強制的に、言いつけられてしまった。

そしてこの前買った、ジーパンはどこかに隠されてしまった。

曰がしばらくたち、

俺はおふくろに買い物を頼まれてしまい、

近くのスーパーマーケットへ来ていた。

俺は頼まれた品物をかごに放り込み、

アイスを食べながら帰ろうとアイスの棚を物色していた。

そしてお目当てのものを見つけ、取ろうとしたところにもうひとつの手が重なった。

「あつすいません」

俺はその手の持ち主の顔を一瞬みた。

そして瞬時に目をそらした。

その相手とは、俺の幼馴染の優希だった。

優希とは小さいときからクラスがずっと一緒に、家も向かいにある。だがこの姿では、初顔合わせだ。

俺は悟られないように、早々とその場を離れようとした。が

優希に手をつかまれてしまった。

そして優希に

「あなたどこかであったこと無い？」

「い、いいえ。あ、ありませんよ。わ、わたしは知りませんよ。」

「そう？なんかむちゃくちゃ私の幼馴染に似ているんだけど？」

「気のせいですよ。」

そういつて俺はその場を離れることが出来、レジに並んだ。

少々遅れて、優希も俺の後ろに並んだ。

俺はこの時、汗がとまらなかった。

そして優希は

「あなたこの後、予定ある？」

俺はこの時正直に「予定は無い」ってこたえてしまった。

この時、俺が「予定がある」と答えれば良かったのだ。

そして俺は優希の家に呼ばれてしまった・・・

第7話（後書き）

涼宮ハルヒの憂鬱にでてくる朝比奈ミクルのメイド服姿のよつに。
→分かる人には分かるよね^^

ようやく、幼馴染が出てきました。

これから話を練っていくつもりです。

第8話

俺は優希に連れられて、優希の家に入ってしまった。

優希の、両親は共働きで、昼間はいないので、この家には俺と優希だけだった。

始めは、優希に連れられて、リビングに行き、出された珈琲を飲んで他愛も無い話をしていた。

俺はばれない様に女言葉にして、話していた。
だが少しずつ、優希が俺のことを探り始めた。

「あなた何処に住んでるの？」

「こ、この近くよ。」

「あなた何歳？」

俺は今の自分の年齢を答えた。

「17歳よ。」

「あなた、私とあったこと無い？」

「な、ないわよ。お、私、最近ここに引っ越してきたばかりだから。」

俺は、あらかじめ聞かれては困ることの、マニュアルを作っておいたから、答えるのは問題ではない。

だが俺はこの幼馴染に嘘をつくことが出来るのかどうかで不安で仕方が無かったのである。

このような調子で、優希による、俺への質問はおよそ30分にもおよんだ。

優希は、ゼイゼイと肩で息をしながら、

（こいつは絶対に高志だ。間違いない。この気配は、絶対に高志のものだ。

絶対にはかしてみせる。）

そのころ俺は、

（優希の奴、妙に敏感だからな・・・もしかして気配とかって、男の俺と一緒にいたりするのかかもしれない・・・）
そうなればボロを出すわけにはいけない。）

二人は違うながらも、決意が胸の中にはあった。

そのまま沈黙が、2分・・・

俺は動き出した。

「ちよつと電話してきてもいいかな？」

遅くなると両親に心配かけるから」

俺は携帯を取り出しながら、聞いた。

そして俺は、廊下に出て、おふくろに電話した。

俺は小声で、

『おふくろ、優希に正体がばれそうだ。』

『あら。頑張つて頂戴。私には何も出来ないわ。』

そういつておふくろから電話をきりやがった。

俺はまた戦場への扉を開けた。

そして俺は元の位置に戻り、優希から発せられる次の言葉をまいった。
すると優希が、

「ねえ貴子ちゃん、夕飯家で食べていく？」

「いや。それは・・・」

「そっか。」

優希はそういった後、爆弾発言をかましてくれました。

「そういえば、女の子になってどう？高志？」

俺はドキッとしたがすぐに冷静になり、誤魔化すことにした。

「えっ？私はもともと女の子だけど？」

そもそも高志って誰？」

と逆に問い詰めてみた。

「そ、それは・・・」

次は、優希から言葉が出てこなくなった。

俺はこれをチャンスに、

「高志って彼氏？」

俺は、自分のことを話題に出し、聞いてみた。

優希は

「か、彼氏なんかじゃないわよ！！それに高志は貴方でしょ！！

いい加減、白状してよ！！こっちだってめんどくさいんだから！！」

「白状も何も私は、高志って子じゃないから、白状なんて出来ないわよ。」

俺は答えた。

だが優希は諦めなかった。

「いいえ！！あなたは絶対、高志なんだから！！」

そこから、優希はなきながら

「わたし・・グスツ・ほんとうは・・グスツ・あなたの・グスツ・・
ことが・・グスツ・」

俺は意地悪に聞き返した。

「あなたのことが？」

だがこの聞き方に地が出ていたようだ。

俺は優希の隠れた笑みに気がつかなかった。

「あなたの・グスツ・・しょう・た・い・おしえて・グスツ・くれ
たら・・グスツ・おしえてあげる・・グスツ・」

俺は優希の泣きに負けた。

「そうだよ。俺は高志だよ。」

そして正体を、あかした。

すると優希はすぐに泣き止み、とてもにこやかな笑顔で

「やっぱり、高志だったんだね^^」

俺はここでもうやく、優希の罠にかかってしまっていたことをしっ
た。

「うそ泣きかー！！」

「もう言い逃れできないね。高志。」

「・・・」

「おや？正体をあかしたとたん、静かになったね。」

でも取り合えず、女になった理由を聞かせてもらおうか？」

俺は駄目もとで誤魔化してみた。

「わ、私、なぜ女になった理由を聞かれても答えられません。

だって私、はじめから女だったのですもの。」

「ここまできて、誤魔化すの？高志？」

優希は俺にむかって上目使いをしてきた。

（だめだ。）

俺はその上目使いにまけた。

俺は姿勢を崩し、

「もう無理か・・・」

そして優希は勝ち誇ったかの様に

「もう無理よ高志。さあ理由を教えて。」

俺は正直に答えた。

すると優希が

「大変な親を持ったものねえ」

「ああそうだな。」

それにしてもよく俺だと分かったな？」

「何年一緒にいると思っているのよ。」

「そうでした。」

「でも高志って、学校転校扱いになるんでしょう？」

「親父が言うのが本当だったらな。」

俺と親父は親父から一方的にメールが送られて来て、簡単に言う業務連絡のようなものが書かれている。

その内容によると男の俺は転校扱いになって、女の俺が、転入扱いにあるだ。

「だったら同じクラスになる可能性は少ないんじゃない？」

「そうかもしれんな。」

「そうだ。このことは誰にも言わないね。」

俺は驚いた。

「なんで？」

「言いふらしてほしい？」

「いや。勘弁してください。」

「でしょ？隠してなきゃ、高志、生活しにくくなるでしょ？」

「まあな。」

そしてこの話を最後に俺は自宅へ帰った。

優希の家から徒歩8歩ほどの帰宅だった。

そしてばれてしまったことをおふくろに報告し、

その日は夕飯も食わずに、寝た。

第8話（後書き）

いよいよ

幼馴染の登場&バレをしました。

第9話

優希に正体がばれた次の日、
俺はいつも通りの起床時間におきた。

すると、俺の部屋には、何故か優希が侵入してきていた。

「高志、おはよう。」

とまあいたって普通の朝の挨拶をしてきた。

「ああ・・・何でここにいる？」

「い、家で何もすることが無かったからこっちにきたわけじゃ・・・」

「暇だったんだな」

優希はとっさの隠し事は苦手だ。

でもこのことは隠さなくてもいいんじゃないか・・・

しかし、何か違和感がある。

声の高さがちよつと違うような・・・

「ち、ちがうわよ!!」

しかし俺は、普通の優希のように接してみた。

「いや、本当に暇だったんだろ？で、俺をからかいに来たが、寝ていたからおきるのを待っていたということか？」

「・・・」

凶星だったようだ。

優希の場合は、ここで諦めずに、もっと言い返してくるはずだった。
昨日の優希とはまったくの別人のようにだった。
と、というか別人だった。

よくよく見てみると、優希以上の胸の大きさと、雰囲気が何か子供っぽい。

こんな奴を俺は優希の家で見たことがある。
というか実際、昨日優希の家で見た。

忘れていたが、優希は双子なのだ。

妹の方が、優希で

姉の方が、美香だ。

俺と優希の話を昨日、盗み聞きしていたようだ。

「美香、何でここにいるんだ？」

盗み聞きしていたことはもうどうにでもならんが、なぜここにいる？」

「いじめたかったから。」

舌をちょこつとだけ出して答えてきた。

（萌え〜〜〜）

おつと理性が飛ぶところだった。

そして俺は美香に

「この事はくれぐれも誰にも内緒で頼む。」

と頼むと、美香は、

「分かった。」

と素直に答えてくれた。

その後、美香は、小一時間ほど俺の家にいたが、俺のゲームを借りて、かえっていった。

（美香の奴何しに來たんだ？）

今日の変わった出来事といえばそれくらいだった。

そして

日は経ち

夏休みがあけるまで、三日

俺は転入することになっていたので、夏休みの宿題なんてものは無く、

自由に、ネットサーフィンをしていた。

そこに、俺の携帯が鳴った。

俺の着信音は、某有名ドラマの主題歌だ。

その電話のディスプレイには、《山崎 優希》と書かれていた。
山崎は優希の、苗字だ。

電話を取る前から、俺は何の電話かを察知した。

「はい。もしもし？」

『たかし〜。た〜す〜け〜て〜

宿題が終わらないよ〜』

やはりこの内容だった。

優希は毎回、宿題をギリギリまでしないと云う性格だ。

そして、毎回俺が手伝っている。

俺は、とつとと終らす派なので困らないが・・・

「それくらい自分でやれ。」

『え〜。高志は宿題無いんでしょ〜。だったら助けて。』

痛いところをつかれてしまった。

それを言われてしまうと俺は反論の余地が無い。

「う・・・」

『でしょ？助けてよ〜（泣）』

「わ、分かった。今から行く。」

結局、今回も手伝う羽目になってしまった。

俺は今日、白のワンピースを着ている。

これもまたおふくろに着させられた。

それで優希の家に行くと、美香が出迎えてくれた。

「いらっしやい。」

「ああ。優希は？」

「部屋よ。」

俺は、優希の部屋に一直線に行った。

後ろのほうで、美香が

「飲み物何がいい？」

と聞いてきたので、

「アルコール入り炭酸飲料」と答えた。

未成年だろ！！と突っ込むのはやめてくれ、これを飲まないと優希の宿題なんか付き合っていられない。

俺は優希の部屋のドアを力いっぱい開け放ち、こういった。

「まだ白紙か！！このクソボケが！！」

そして、部屋の中を見てみると、優希が、正座をして待っていた。そして、

「すみませ〜ん。次からはちゃん〜」

「いつもそういつてしないだろうが！！分からない所は教えてやるから出来るかぎり自分でやりやがれ！！。」

俺は正論を言っただけだ。

しかし、優希は

「無理！！」

即答してくれました。

こんな感じだから、アルコールが欠かせないのだ。

俺はここで美香が持ってきてくれた、缶のプルタブを開け飲み干した。

そして俺は諦め、優希の宿題を、分けて進めていった。

そして徹夜して次の日の朝、俺は分けられた宿題を全て仕上げた。

優希は・・・いびきをかいて爆睡中。

我ながら、すばらしいものだこの集中力は・・・いつの間にか次の日が来ていたし

優希のいびきすら聞こえないくらいにまでとは・・・

（優希は、女らしさがないな・・・口調ぐらいか。）

俺は優希を起こさぬよう優希の部屋をでて自分の家に戻って寝た。

あと2日でスカートをはいて、学校に行くというのに、のんきな者だと思いがら・・・

第9話（後書き）

1・未成年の飲酒は止めましょう。

&

2・飲酒運転は止めましょう。

1は忘れましたが、2は確か道路交通法に引つかかるはずですが・・・
間違えてるかな・・・

第10話

俺は、今起きたところだ。

時計を見てみると、8時00分

まだ大丈夫だ。

俺はそう確信して、二度寝を決行したが、俺は今日が何日かを思い出した。

9月1日・・・新学期の始まりだ。

そして俺の新たな人生の第一歩の日だ。

昨日、一昨日と寝て過ごしていると、早々と過ぎてしまい
いつの間にか、今日が来ていた。

俺が通う高校は、徒歩で20分、自転車だと10分でつける距離にあるが、

俺はいま女なのだ。

今までの身支度の時間では終わらない。

生徒は、8時40分までに登校すればよい

だが俺は今日、転入生として、高校に行く。

皆よりも早く行き色々としなくてはいけないことがある。

だから昨日学校側から電話があり、8時20分には着てくれといわれた。

俺は、急いで起きだし、女子の制服に着替え、パンを食べながら、髪を整えていた。

すると、8時10分になり、俺は親の自転車に乗り、全力でこいだ。自分の自転車を使わないのは、高校の自転車シールが貼ってあるからである。

そして俺はギリギリ間に合った。

職員室のドアを開け、

「失礼します。」

取り合えず、礼をして入った。

「え」と君が今回、転入してくる、山本貴子さんだね？」

この人がこの校長だ。

見事に頭が禿ており、蛍光灯の光が当たってまぶしい。

「は、はい！！そうです。」

俺はあくまで緊張しているように偽った。

「それでは山本さんのクラスの担任に、合わせよう。」

そういつて、俺には見覚えのある先生だった。

「よろしく。私が、君を受け持つことになった、多田 孝則 だ。」

この先生は、俺の元担任で、今優希のクラスを受け持っている先生だ。

この先生は、生徒からとても人気があり、敬語を使わなくて良い数少ない先生だ。

「それでは多田君、あとは任せたよ。」

校長は案内すると、とつとといなくなった。

しばしの沈黙のあと、

「え」と山本さんだったかな？」

「それで、失礼しました。はい。そうです。」

俺は、いつもの調子で話しかけてしまいかけた。

「アハハハ。気楽にしてもらってもいいよ。私は、そういうのにこだわらないから。」

「分かりました。」

俺は、女言葉にするのを忘れないように、しながら堅苦しい敬語を捨て去った。

キンコンカンコン

始業のチャイムがなった。

「じゃあ新しいクラスメートに顔合わしに行きましょう。」

「は、はい。」

俺は思い出した。

この先生が、担任だということは俺は、優希と同じクラスになったのではないかと、
今になって気がついた。

俺は

「先生。私ちよっとお手洗いに・・・」

「ああいつてらっしゃい」

俺は優希にメールをしようと、トイレに入った。

そして最新機種の手帳を取り出し、優希にメールを打った。
すると返信が早々と返ってきた。

《頑張つてね。

私は黙っておくから。》

と来た。

これなら安心だろう。

俺はトイレから出て先生と教室に向かった。

教室に着くと先生に、廊下で待つようにいわれ、待っていると
中から、入って来いといわれた。

俺は教壇の前に立たされ、自己紹介をした。

「この度、転入をしてきた。山本貴子です。よろしくお願いします。」

「

教室中が雑踏に包まれた。

すると先生が、一喝した。

「うるさいぞ!!」

それだけで、静かになった。

「山本さんは、その窓側の席に座ってね。」
そこは俺の席だったはずだ。

俺は、その席に向かい、座った。

横は、優希だった。

そしてHRも終わり、先生が職員室に帰ると、俺の周りに生徒たちが集まってきた。

そして質問を浴びせてきた。

最初は定番の何処からきたのだったか
最後のほうは何故か放送禁止用語に入っている言葉を連発して聞いた様な気がした。

一時間目の数学の先生が来て、
授業が始まった。

俺は、まじめに授業を受けていた。

その横で優希は寝てしまっていたが・・・
そうして俺の高校初日は終わっていった。

第10話（後書き）

更新遅いです・・・
すみません（泣）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2353h/>

初投稿です。。。

2010年10月10日03時47分発行